

青年海外協力隊員レポート

エジプト・レポート③

前田 房美（北川原）

『9・11』『イラク戦争』

赴任して2か月目には『9・11』を、帰国前3か月には『イラク戦争』をエジプトで経験することになりました。エジプトに行くまでイスラエル？パレスチナ？反米？まったくといっていいほど関心さえありませんでした。しかし、イスラエルとは国境を接しているエジプトにおいて、日々イスラエル・パレスチナやアメリカのことが話題にのほりま

した。
あるときにはジュースをだしてくれた友人が「今はペプシやコーラは飲まないようにしてるの。だってアメリカのものだから。」と言ってきた。なぜアメリカのものはいけないのかとたずねれば、「アメリカからのジュースを飲めばアメリカにお金が出ていくでしょ。そしたらアメリカからイスラエルにお金が出ていくでしょ。だからよ。」
「だってね。見て。」そう言ってインターネットからの映像

を見せてくれました。そこにはまさに流血しながら倒れている人。小学生くらいの女の子が、恐れおののくように耳をふさぎながら身体をかがめて走って逃げているところ。両手両足に力はなく、だらりと下にたらし、すでに息絶えたらしい赤ちゃんを抱いた母親が泣き叫んでいる様子などが映し出されていました。「イスラエル（パレスチナ）ではこんなことが毎日おこっているの。なのになぜアメリカは何も言わず手を貸すばかりなの？他の国には『戦争はダメだ。テロはダメだ。』っていうけど、殺し合いが日々行われているイスラエルが野放しなのはなぜ？」と悲しげに訴えていました。イスラエル・パレスチナの話になると複雑に宗教も関わってくるため深い話になってしまいうのですが、私が住んでいた町はつい最近まで中東戦争の舞台となつて

いたといつても過言ではなく、戦争経験者も多い中で殊に『戦い』『戦争』ということには敏感になっていました。実際、友人の母親の年代で「戦いのときは隣町に逃げていたのよ。この町にもイスラエル人がパラシュートでたくさん降りてきて、残された女たちは台所の鍋のふたや包丁を持って戦っていたのよ。」と話してくれました。そんな彼女もまた、弟をイスラエルとの戦いで亡くしているのです。
『戦争』という悲しみを身をもつて知っているだけにイラク戦争の際にも、かなり敏感に受け止められていました。友人宅・活動先・お店のどこに行っても話題はこの話ばかりでした。そんな状況だけに日本がアメリカ指示を表明した直後、イラクへの攻撃が始まった直後は、活動先に着くなり「日本も戦争するんですよ！」「アメリカの味方だ！」と言われました。身近な同僚なのでこちらの心情もわかってくれ、それ以上いうことはありませんでしたが、一歩外に出れば日本の国旗を背負って歩いているようなもので戦争反対と思つていても、『アメリカの味方』戦争を支持している日本人』なのです。反米主義の人が多いなかでの反日感情の高まりを警戒するとい

うこと以上に、さまざまな思いと申し訳なきが入り混じり、しばらく外を歩く気にもなれませんでした。

日々イスラム教徒と生活している彼らの優しさを身にしみて感じます。『あなたが嬉しいなら私も嬉しい。あなたが悲しいなら私も悲しい。』そう思える人たちであるがゆえに、同じイスラム教徒たちが戦いで幼き子も含めて命を落としていくことを、まるで家族が亡くなるかのような悲しみとして受け止められていました。戦争は嫌だと言つていてもテレビを消してしまえば忘れて笑いあうことができ、戦闘機の音さえも知らず、もちろん戦争の悲しみも実態として感じられない現代の日本人。私が住んでいた町を飛んでいるのは戦闘機だけでした。子どもたちは『飛行機』

として認識しています。イスラムという日本とはまったく違う環境で育った人たち。そんなイスラム教としての連帯感や悲しみの深さ、日本人には一生かかっても理解できないであろう良い意味での心情・奥深さを感じます。
イラク戦争の最中、米国務省は、米国内外の著名な専門家を集めて欧州やロシア・イ

スラム圏でなぜ反米主義がひろがっているのかなどについて幅広く意見交換し、専門家の意見を今後の外交政策に反映していくというニュースを聞きました。知識人の机上での話し合いで、いわゆるイスラム圏の人々の思いをどこまで理解しようのでしょうか。純粋に興味深い今日このごろです。



▲首都カイロの街なみです。まん中の川はナイル川です。

3回に渡りご好評をいただいた「エジプト・レポート」ですが、今回で最終回となりました。

前田房美さんにはお忙しい中、ご執筆いただきありがとうございます。紙面ではありませんが、お礼申し上げます。今後もお活躍くださいますよう、お祈り申し上げます。